



Title	探求者における「自らに由る」ことを涵養する探求活動についての一考察
Author(s)	岡崎, 洋三
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2023, 27, p. 47-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90844
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

探求者における「自らに由る」ことを 涵養する探求活動についての一考察

岡崎 洋三*

要 旨

人の知的活動の中で、探究および探求活動は、活動を内的に駆動するものとしての人の内発性のある活力が注目されるものである。この活力は、主体としての自らなるものに由ることとしての自由と深い関係にあり、そのような自由は自由自在の境地を目指すという志向をもっている。この自由と自由自在は人の生涯発達の中に在るものとして捉えることが可能なものであり、人の言語活動の質を変容させるものである可能性がある。

【キーワード】 内発的活力、自由、自らに由ること、母語での言語活動、探求、探究

1 はじめに

本論は、日本語教育において「日本語力」として捉えられているものについての質的な研究である。客観的学力を中心とする「日本語力」に対して、プロジェクト型の探究および探求活動において育成される「日本語力」の質を探るものである。

筆者には、学習者の「日本語力」のみならず、学習者の母語での言語活動の質に注目するという観点があり、これを展開させることによって、本論において、日本語の母語話者にとっての「日本語力」の質についての考究を行なってみる。

この質については、人の活動を内的に駆動させる人の内発性のある活力と活性が注目され、そのような活動の一つのものとして探究および探求活動を考究の対象とすることができる。そして、この内発的活力は、主体としての「自らに由ること」としての自由として捉えることができるのではないかと、という検討を行なう。本論で言う自由とは、日本の仏教語としての自由でもあるという観点に立って、なぜ自由についての考究を行なうのかについて述べる。

表題で言う探求者とは、探究および探求活動を行なう者のことを広く言っているが、その事例として

は岡崎（2022）で検討した梅棹忠夫、本多勝一、養老孟司があり、これに玄侑宗久を加えて、自由についての探索的考察を行なう。そして、より深い検討を意図して、ピーター・センゲの思想をとりあげて、本論の観点からの疑問と主張を述べてみる。

2 学習者の母語での言語活動の質と、その経験知と経験値への注目

2-1 一つの分かれ道

筆者は、日本語を非母語とする日本語教育の学習者に対して、「日本語力」だけではなく、学習者の母語での言語活動の質について注目しており、それが具体的にどのようなものを示すものとしての経験知と経験値に強い関心を持っている。これについて日本人対象の英語教育の場合で言うと、行なうのは英語教育なのであるが、学習者の母語である日本語での言語活動の質と経験知と経験値について注目するということになる。例えば、母語である日本語でレポートを書いたことがないという学習者が英語教育において英語でレポートを書くという場合、行なうのは英語での学習と言語活動なのだが、母語でのその言語活動の経験知と経験値の不足が影響を与え

* 大阪大学国際教育交流センター非常勤講師

ることになるのではないか、ということである。これは、教育現場の実際について言うならば、英語教育を実施しながら、母語での教育も何らかの形で行なうのが望ましいという、日本語での特別補習も場合によっては必要になる可能性がある、というようなことである。

経験知とは、体験を経て経験となって身についた知のことを言っており、現場や本番で活かされる知であり、その価値としての経験値があるというものである。本論で考察するのは、このような母語での言語活動に求められる諸力であり、それを重視することである。このことは、日本語教育における教育の在り方として、一つに分かれ道となるであろう。日本語教育という「看板」の下で、学習者の母語での諸力に注目するかどうか、そして重視するかしないかの分かれ道である。管見では、注目し重視するというのは少数派であるだろう。

筆者のこの問題意識は、近年、上級クラスでのプロジェクト型の教育を実践する中で、その指導において問題意識として思いを強くしてきたものである。学生のプロジェクトの指導を行なう中で、「この学生は母語であれば、今やっている日本語でのプロジェクトをもっと主体的かつ内発的に進めることができるだろうか？ 母語でも、なかなかできないのではないか？」と思われる学生がいることについて考えさせられるようになってきた、ということである。これについては日本語教育では、あくまでも日本語力の不足とされるものが指導上の課題になるわけだが、それだけではなく、母語あるいは母語相当の言語での言語活動における経験知と経験値の不足もまた問題視されるということである。

上記でいうプロジェクト型の教育とは、後に5-2節で述べる市川（2009; 2013; 2019）や荒瀬（2007; 2008）の探究型の教育実践に通じるものを持つものを持っている。広く日本の学校教育で言うならば、探究型の教育での経験知と経験値を持つ児童・生徒と、そうではない者がいて、前者は少数派になるだろう。これと同様のことが、日本語教育の学習者についても言えるのではないか、ということである。すなわち、ここで言う分かれ道には、日本語教育において学習者の母語での言語活動の諸力に注目するかどうかだけではなく、広く学校教育というものにおいて探究型の教育を実践するかどうかという分かれ道もあるだろう、ということである。

2-2 言語活動を生み出す内発的活力と、自由なるもの

言語活動の質について考究する際に、どのようなものを重視するか。人の内発的な活力と活性に注目し、その言語活動をやらずにはいられない、やりたいたいからやるという一種の内的必然性を重んじることができる。例えば、研究者は自身の研究をやらずにはいられないという内的必然性を持っている、というようなことである。

人の内的な活力と活性については、いわゆる欲望や欲求から生じるという観点があるが、これに対して、本論で注目するのは自由というものである。自由は日常用語であり、子どもでも知っている言葉であるが、実は容易には捉え難いものをもっているのである。そのような自由なるものについて考究することが、言語活動を内的に活性化させるものについての探求にもなるのではないか、ということである。まず、次節において自由なるものについての考察を行なってみる。

3 自由とはいかなるものか？

3-1 辞書的な意味

自由の辞書的な意味は次の通りである。「心のままであること。思う通り。自在。古くは、勝手気ままの意に用いた。(freedom; liberty) 責任をもって何かをすることに障害(束縛・強制など)がないこと。一定の前提条件の上で成立しており、無条件的な自由は人間にはない。また自由は、障害の除去・緩和によって拡大するため、目的のために自然的・社会的条件を変革することは自由の増大とされる。この意味での自由は、自然・社会の法則の認識を通じて実現される」。そして、社会的自由、意志の自由、倫理的自由があるとして、「カントにおいては、意志が感性的欲望に束縛されず、理性的な道徳命令に服することで、自律と同義。サルトルにおいては、人間はその存在構造から本来的に自由であり、したがって常に未来の選択へと強えられる点で自由は重荷となる。」と述べられている(広辞苑第七版)。自由化とは、統制や管理をなくすことだが、日常用語としての自由とはこのような語義が中心となるものである。

日本語の自由は英訳すると、freedom; libertyになるが、これは森岡(1969)や加藤(1991)などの文献によれば、明治時代にそうなったものである。西

洋の科学技術や思想が日本に入って来た時に、freedom; liberty の日本語訳として日本語の自由が選ばれて、それが社会的に定着したのであった。

以上のことから生じる問いとしては、それでは明治以前の日本での自由とは、やはり意味としては freedom や liberty に相当するものだったのか？ ということである。

3-2 日本の仏教における自由

日本語の自由は、文献によれば仏教の禪語であるという。これについて、僧侶で芥川賞作家の玄侑宗久の著作と、臨済宗の僧侶である安永祖堂の論文をみってみる。

3-2-1 日本の仏教における自由 玄侑宗久の自由

玄侑宗久はその著作において、日本語の自由について簡潔に次のように述べている。

自由の最も古い用例は『後漢書』にあり、今と同じように selfish の意味で用いられている。仏教語としての自由の始まりは、サンسكريット語のスヴァヤン、あるいはスヴァヤンパーの訳語に選ばれたことで、独立自存たる「さとり」の境地を意味する。七世紀初めに禪語として登場した「自由」は、やがて八世紀末になるとどんどん賞揚される。「自由の分」つまり自由な境涯を得ることが禅僧としての究極の達成という雰囲気になってくるのである。もとより仏教では、あらかじめ存在する「自」など想定してはいない。尊ぶという思念のなかにいつしか「自」が立ち上がってくるのが自尊であり、「由る」という行為によってゆるゆると「自」が浮かび上がることこそ自由ではないか。自己とはこういうものだと、現在のように予め措定することほど不自由なことではないのである。禪語としての自由は「自由自在」と言うときのみ、わずかに生き残っているような気がする。鈴木大拙は自由を英訳するとき、freedom でも liberty でもなく、self-reliance と訳した。他に依拠せず、外に求めないからこそ自由なのである。(玄侑 2014: 92-93 より要約)

つまり、日本語の自由は中国の漢字の自由であり、そして日本の仏教の禪語でもあるということである。玄侑の言う、尊ぶという思念のなかにいつしか「自」が立ち上がってくるのが自尊であり、「由る」という行為によってゆるゆると「自」が浮かび上がることこそ自由ではないか、とする自由というものについ

ては、日本人にとっての自由とは？ と考えさせられるものがある。

3-2-2 日本の仏教における自由 安永祖堂の自由

安永 (2004-2005) は、臨済宗の僧侶として禪語としての自由の概念について次のように考究している。

中国の古代漢語としての自由は、『後漢書』に見られるように、恣意的な、思いのまま、勝手気ままを意味する言葉であった。自由は、日本では明治時代に英語の freedom や liberty の訳語となったが、これに対して鈴木大拙 (1870-1966) は禅的な自由はこれとは異なるものだと、「自」という「絶対主体」(真人) の確立があって、その「自らに由る」こととした。安永は、「自らに由る」と読むとするならば「由自」と表記しなければならないのではないかという疑問を發した上で、大拙が「自らに由る」と読んだことについて、自由の英訳を大拙が self-reliance (独立独行) としたことに注目し、self- という英語の接頭辞の持つニュアンスをそのまま「自」にも意図的に混用したのではないか、という解釈を行なっている。そして、禅にあっては仏から自由であり、悟りから自由であり、そして何よりも自己から自由でなければならぬとし、積極的自由の位階に立つならば、対象を認めぬままに、なおかつ「由る」とは意識せずに「由る」というところに、「無依」という禅ならではの面目を見出すことができるのではないかと述べている。それゆえに、禪語の自由の字眼は「自」ではなくむしろ「由」にあると安永は考え、我々にとって留意すべきことは、大拙の言う絶対主体の確立ではなく、むしろ絶対主体の活潑潑地たる作用に重点を置くべきであり、静的なものではなく、あくまでも動態の表現としての自由こそが禪語として相応しいと結論づけている。

以上に対する本論の見解としては、禪語としての自由なるものは、現代語としての自由がもつ複数の概念の中の一つのものだろうということである。筆者の観点では、「自」なるもの、自らなるものは変数で未知数である X であり、それにどのように「由る」のか、という問いがあるということである。

3-3 本論で言う自由とは？

以上をふまえて、本論で言う自由とは、「自らなるものに由ること」であるととする。この自らなるものとは、人の成長と生涯発達においてつくられていき、

変化していくとするものである。人はこの自らなるものを自分自身でつくることもできる。内的に生じる人の活力と活性とは、この自らなるものから生み出されるものである。

この自らなるものは、人生における体験と経験の影響を受けてしまうというものである。それは、他者、出来事、社会、環境の影響を受けるということである。人が体質的かつ気質的に生まれ持つものがあり、そして、それが様々な影響を受けて、自らなるものがつくられていき、変化していくということである。これは、完成して不変の自らなるものは実在はしないと捉えるということである。

この自らなるものについては、自然との関係についても考えさせられる。自然とは英語の nature だけではなく、仏教でいう自然^{じねん}、「自ずから然り」を含むものである。日本語のみずからとおのずからは、同じ「自」を使っているが、みずからがおのずからになることについて考えさせられるということである。

このような「自らに由ること」を英語で表現するならば、鈴木大拙の言う self-reliance が最も近いのではないかと思われる。

4 自由の実際についての事例的考察

自由なるものの質について、その実際のところ、事例として捉えられるものをみでみる。岡崎 (2022) で考察の対象とした3人、梅棹忠夫、本多勝一、養老孟司に加えて、自由についての簡潔な見解を述べている玄侑宗久の場合について、自由とはいかなるものであり得るのかということについてみてみよう。

4-1 梅棹忠夫にとっての自由

学者であるだけでなく、思想家としても日本社会に影響を与えた梅棹忠夫 (1920-2010) は、好奇心と挑戦の精神を持ち続けた自由なる人であった。梅棹が熱中し、夢中になったもの、昆虫採集、登山、探検をやることは、梅棹にとってそれをやらずにはいられないというものであり、これらの活動は自由なる精神によって行なわれた。梅棹の自伝的著作に『行為と妄想』があるが、自由に行動することと妄想することを梅棹は生涯求め続けた。

梅棹の最後の著作物となった『梅棹忠夫 語る』において述べられているように、梅棹の人生においてはいくつもの試練と困難があり、不自由もまたい

くつもあった。例えば、旧制高校の山岳部時代に、登山に熱中するあまり退学処分になりかけたこと、青年時代に肺結核に罹って失意の日々を過ごしたこと、66歳の時に失明状態になったことがあるが、自由に生きれば生きるほど不自由の試練と艱難にも遭遇し、幾多の困難を乗り越えて梅棹は「我が道」を全うしたのであった。

4-2 本多勝一にとっての自由

ベトナム戦争報道や日中戦争の生き証人への聞き書きなど、日本のジャーナリズム史に残る傑出した仕事をした本多勝一 (1931-) は、高校生の時に高山の世界に感動し、遭難の危機のある山行を体験することによって山と出会い、山に熱中するようになる。それは「旅というもの」への憧れとなっていき、海外遠征としての登山と探検へと発展した。山と旅と探検において本多はまったくの自由人であった。

朝日新聞記者となり、報道の世界に入ってから、山岳遭難のスクープを契機に、自らの企画での長期海外取材が可能になり、本多独自の報道が実現することになる。そのルポルタージュ記事が反響を呼び、多くの読者の支持を得たことで、本多の活躍の場は広がっていった。本多の企画記事は、特定の専門が無いというほど広範な対象についてのルポルタージュとなっていき、そして全30巻の著作集の刊行に至った。

その本多にとっての不自由とは、重度身体障害者の妹のことも考慮して、大学卒業後は故郷に帰り、長男として家業を継いで親を安心させることであったと言えるかもしれない。大学進学に際して、本多には親の命令に従って不本意な進学を余儀なくされて、失意の日々を送った経験がある。これはまったくの不自由の中にいたという経験であった。この親との約束を果たした後、本多は初志を貫徹して希望の大学に1年生として入学し、海外遠征と探検に挑んだのであった。これを一步引いてみるならば、本多は、命を落としかねない危険な登山、探検、海外取材などをやってはいけなかったのかもしれない。そして、報道の世界においても、言論の自由とは常に言論の不自由と隣り合わせのものであり、報道における自由は勝ち取らなければ得られないものなのであった。自らの企画による報道が読者に支持されることによって、ジャーナリストとしての本多は自由になっていき、独自の報道の世界をつ

くっていった。

4-3 養老孟司にとっての自由

社会的な肩書は解剖学者で、その言論としては思想家とも言える養老孟司(1937-)は、幼い頃に、昆虫や身近な生き物に夢中になる。以後、昆虫採集と標本づくりは生涯の愉悦となった。虫と愛猫は、養老にとって、この世の様々なことから自らを解き放って自由な存在になることができるものであったと言えるだろう。

養老は国立大学の医学部の解剖学教室において、公務としての仕事を長年続けたが、それは一種の修行のようなものであったと述懐している(養老・玄侑 2005: 29-30)。これについては、解剖学教室の長い年月は自由ではなかった、と言っているとも解釈されるのである。養老の著作を読むと次のようなことについて考えさせられる。養老は母子家庭の子弟であり、開業医であった母親の懇願によって医学の道に進んだということ、養老自身の意志としては昆虫学か動物学関係に進みたかったということ、解剖学に進んではみたものの、適性や何かの才能が見出されたわけではなかったこと、そして、養老はキリスト教のイエズス会の中学・高校で思春期を過ごしたことで、何かしらの奉仕的精神のようなものがあるらしかったことが、養老のいう修行という言葉と何らかの関係があるように思われる。

解剖学者である養老が、世に向かって広く自身の言論を発するようになったのは、一般書の第1作『ヒトの見方』(1985年)からであるが、これを養老にとっての言論の自由の活動の開始と解釈することができる。これは本人にとってそうせざるを得ないものであり、言論を展開することが自らを解き放つことになっていくことになるのだと捉えられるだろう。この「自らを解き放つ」とは、養老が4歳の時の父親の早逝によって受けた刻印的体験について一種の克服を成し、自らの為すべき天命について邁進できるようになるために「自らを解き放つ」必要があったというような意味である。自らを心の奥底で不自由にしていたものと対峙し、心を自由にするための解き放ちが必要だったということである。

4-4 玄侑宗久にとっての自由

玄侑宗久(1956-)にとっての自由とは、3-2-1節で述べたものであるのだが、事例的な自由という

ものについてもみてみたい。

玄侑の著作を読むと次のことがわかる。玄侑は生家が臨済宗妙心寺派の禅寺であり、玄侑は長男として後を継いで僧侶になることについての葛藤があったという。高校生くらいからいろいろな宗教についての見聞を体験的に深めていくが、文学への志向も芽生えていた。大学では中国文学を専攻し、中国の現代戯曲の研究をしたが、青春の野心と志としては、文学か宗教かで揺れ動き、苦しんだ。この頃について語った言葉として、「大学を出てからは、コピーライターをやったり、「これなら書く時間があるな」と思ってゴミ焼き場に勤めたり、あるいは夜の商売でフロアマネージャーをしたり、とにかく書きたいという気持ちでいろいろやってみて、一時は親から見れば行方不明のような状態でしたからね。本当に親不孝者です。」(玄侑 2004a: 161)という述懐がある。当時について玄侑は、私は「青春」という暗澹を生きていたのであり、私の「青春」は二度と戻りたくない時代である、というような言葉も発している(玄侑 2004b: 16-19より)。

玄侑は、いったんは創作活動を中断し、27歳の時に京都の天龍寺の専門道場に入り、僧侶としての修行をする。そして、故郷の実家の寺に戻り、僧侶としての道を歩む。僧侶になって13年ほどは小説を書こうと思わなかったという。そして、2001年に芥川賞を受賞して注目され、僧侶で作家という道を歩み続けて現在に至っている。

以上のことについては、二つのことが考えさせられる。一つは、若者としての玄侑宗久は、第三者的に見るならば、自分がやりたいことをやりたいようにやったということにおいて自由だった、と言えるか? ということである。これは、本人が苦しんでいる限り、それを自由と呼ぶことは難しいのではないか、ということである。青年としての玄侑は、仏道への修行によって何らかの自由の精神を体得し、自由になっていき、そして年月を経て作品を書くようになり、それが評価されて自己評価もできるようになったのだが、このときこそ、明らかに自由になった、と言えるのではないか、ということである。

もう一つは、中国の荘子についての玄侑の著作(玄侑 2010b)への注目である。玄侑の記述における荘子とは、自由なるものを開拓し、創り出し、体現している人物に他ならないと解釈されるのだが、このような荘子についての創作性のある作品を書き上げ

ることによって、作者である玄侑宗久も自由になったのではないか、ということである。

つまりは、人が生きていく中で実現や達成や、何らかの諦観の体得が必要であり、これによって人は自由を会得できるのではないか、ということである。修行道場の日々によって得られたもの、僧侶としての生活の中で得られたもの、満足できる作品をつくることによって得られたものが、玄侑宗久を自由にしていっただろう、ということである。

諦観とは、仏教的な諦観のことを言っており、明らかではないものを明らかにし、明るくないものを明るくするという意味での諦め、諦についての観のことを言っており、これにより迷いが縮減し、歩みが確かなものになるということここでは言っている。

4-5 4人の言語活動と自由についての考察

以上の4人についての考察を行なってみる。梅棹と本多には、青年時代における探検への同族的な関係性もあり、その言語活動については、探検対象という言語化の対象となるものがあって、対象や出来事を文章で描くということが中心となるものだった。具体的には登山記、探検記、紀行文である。これに対して、養老と玄侑の言語活動においては、対象を「この私」がどのように捉えるかということ、「この私」が対象についてどのように考えるかが中心になっている。養老においては、解剖学教室での死体というものを「この私」がどう見るか、どう捉えるかが養老の初期の論考を生んだ。玄侑においては、小説家志望の人間であったのであり、小説家として認められてから、仏教についての玄侑の思索と思想についても語るようになっていったということである。事実や現実そのものではなく、それを作品世界のものとして捉えることに挑み、そして仏教という心と精神の世界について語るということである。

4人に共通して言えることは、「出会い」となる体験があって、それが覚醒的な「目覚め」となり、失敗や紆余曲折を経て、実現、達成、諦観の体得があったと考えられるということである。梅棹と本多は、山、自然、探検対象との出会いがあり、それが「目覚め」となっていった。養老の場合は、少し複雑で、昆虫や生き物との幸福な出会いがあったのだが、幼少時における父親との衝撃的な別れという体験が、広義の「出会い」となったと解釈できることだ。ここでいう広義の「出会い」とは、刻印的体験となる

ものと遭遇したということ「出会い」に含めているということである。玄侑の場合は、小説家になることをいったん断念し、27歳で修行道場に入門したことが「出会い」となる体験になったと考えられる。

そして、自由とは、自らの心を縛るものを無くし、心理的かつ精神的に解き放たれることだと言える。この自由はいつも同じようなものとして心の中に在るものではなく、むしろ日常的には不自由を感じさせられるというものである。活動を発展させていくことを通して自由と不自由を繰り返すことになるのだが、しかし螺旋階段を上り続けるような上昇を続けており、それは自在の境地に向かうものである。自由とは自由自在の境地に至ってこそ「身につく」ものとなる。これは鈴木大拙のいう self-reliance に近いものだと筆者には考えられる。それは「自ら」が「自ずから」になることだとも言えるだろう。

5 なぜ自由に注目するのか？

5-1 表現活動と自由

近年の筆者の研究テーマは、表現活動と呼ぶものについての質的研究であった。細川 (2020; 2021) のいう総合活動型日本語教育と、西口 (2020) のいう表現活動に学んだ上で、筆者のいう表現活動とは、書くことに先行する何らかの活動があって、書きたいものは本人においてよくわかっているとは限らないもので、しかし、その活動をやらすにはいられないという内的必然性があるものと定義している (岡崎 2022: 20)。これは、より抽象的に表現するならば、まず本人にとっての「良く生きている」という活動があり、それを表現すること、ex-press、内なるものから ex 外に press 押し出すというもので、教育においては、その活動における本人の感受性と内発性が注目されるというものである。

これについて、まずは、このような表現活動をすることの自由があると考えられた。それは、憲法で保障する言論の自由とされるものだけではなく、より広くより深く人が良く生きているということに関わる自由ではないかということである。そして、漢字の自由という文字を改めて見てみたところ、自なるものが存在し、由なるものがあることに対して、自由とは英訳でいう freedom や liberty という意味だけであろうか、という問いが生じたのである。自なるものが自己、自分、自ら、自ずからであるとした

ら、それは、つくられていくものであり、変わり続けるものであり、当人自身がつくっていくものであり、それに由ることもまた様々なものがあると思われたのである。活動を内的に駆動する内発性と感受性の主体としての自らというものがあり、その自らについての注目から自由なるものについての考究に発展したということである。

5-2 探究と自由

人の内発的な活力が必要とされる活動の一つに研究活動があるが、本論では、より一般性のあるものとして探究と探求について注目する。

探究としては、近年においては、荒瀬 (2007; 2008) や、市川 (2009; 2013; 2019) のいう探究があるが、荒瀬のいう探究とは、高校において自然探究科と人間探究科という課程を創設し、研究志向の活動を高校生にチャレンジさせるものだと言える。市川のいう探究とは、小学生を対象に、オルタナティブスクールにおいて、アメリカのプロジェクト学習や国際バカロレアの教育を参考にしつつも、市川の人間力によって活性化されて展開される活動だと捉えることができるだろう。

筆者の注目点は、市川においては、小学生が「学び続ける力」の基盤を形成していく上で第一に取り組むべき「テーマ」は、自分の素晴らしさを知るための探究であり、「学び続ける力」は、自分が主体的に動けば、何かを知り、発見できるはずだと信じて疑わない「自己効力感」に支えられており、したがって「自己効力感」を高めていくことが、「学び続ける力」を育てる第一歩となる、としている点である (市川 2009: 22)。市川のいう「自己効力感」が「自らなるもの」を形成し、創造していくことにおいて重視されるということである。

荒瀬についての筆者の注目点としては、探究における研究テーマは基本的には生徒が決めるわけだが、やはり難しく、ゼミの中の担当者や、あるいは大学院生の指導なども受けながら決めており、生徒も大変だが、テーマを設定するときの教員の大変さというのは、ちょっと筆舌に尽くしがたいものがあるとして (荒瀬 2008: 65-66)、指導において大事な点として、次のように述べている点である。生徒が自ら学ぶためのきっかけをつくるのが大事で、生徒ときっちり話をすることがポイントであり、その子がどういう状況にあるかということがわからな

いまま何かを提示してもダメである。学校の授業というのは、いわば定食メニューだが、生徒一人一人のためのメニューを一週間に一度でも一月に一度でも、できることなら毎日少しでも出せるかどうか。そうするためには生徒との関わり合いをしっかりと築いていくことが大事なのではないかと思う、としていることである (荒瀬 2008: 93-94)。

これらの見解は、探究ができるかどうかの「分かれ道」について語っていると解釈されるのだが、筆者の観点においては、探究の主体となる「自らなるもの」が必要であり、それが活性化されて育っていくということが不可欠だとしているということである。それは「由るもの」としての「自らなるもの」が形成され創造されていくことだということであり、すなわち、そのような自由がキーワードになるのではないか、ということである。

5-3 上級クラスのプロジェクト活動の指導と、自由

岡崎 (2022) で述べた筆者の教育実践を改善するものとして、以下、述べてみる。

学生に求めている探求活動とは、知りたい、分きたい、考えたい、発見したい、作品をつくりたいということについての学生の内発的な活力によって行なわれる言語活動である。どういうものを「出発点」にして探求的なプロジェクトを開始し、どういうところが「ゴール」になるかについて伴走的に指導してそれを見届けるというものである。これは学生にとってのチャレンジとなるものであり、イメージ的には当人にとっての未踏の山への登頂を共に目指すというものである。苦しさの中で手応えや喜びや満足感や達成感が得られるようになることが指導者としての責務になる。未踏の山への登頂というイメージで補足するならば、登山の経験が無いという者が、外国に住むようになって外国の山に外国人といっしょにチャレンジな山登りを行なうというのは、いったいどうなるか？ という挑戦になる可能性があるということである。

指導において常に考えさせられ続けることは二つである。一つは、学生の状態が「少し良くなる」という教育が為されようとしているかどうかである。「少し」とは、例えば、一回の授業で良くなるのが可能なものとしての「少し」があり、端的には+1となるものである。「良くなる」とは、能力に関する

ものだけではなく、姿勢や態度や心の在り方、感覚的なものを含むもので、それが実際のところどのようなものになるのかは、臨床的に考え続けていくというものである¹⁾。

もう一つは、探求プロジェクトを行なう者が自分にとっての良い問いを見つけることへの教育的関与である。この良い問いとは、プロジェクトの出発点になるものであると同時に、成果となる到着点に決定的な影響を及ぼすものである。漠然とし過ぎている問いや難しすぎる問いは、断念や多くの試行錯誤や回り道や挫折という結果を生む恐れがあるのである。

そもそも問いというものは、答えが既にどこかにあるという問いがある一方で、どこにも「正解」はありそうにないというものである。学校教育で扱われる質問や問いは、そのほとんど全てが答えや正解が既にあるものである。一方、人の人生や世界の森羅万象において正解となるものがよくわからないという「問題」は溢れている。探求プロジェクトにおける良い問いとは、「この私」にとっての良い問いにほかならないのだが、「この私」とは発展途中のものであり、良いということは、自分を少し良くするものであり、自らを向上させたり変革させるものである。つまり、自分で自分を越えるという難しさがあるのである。

このようなプロジェクトを、母語ではない言語や外国語でやることは、よりチャレンジングなことになる。母語においてすら難しいことを、言語力についての新たな育成も上乘せして行なうことになるのである。

良い問いを見つけることの困難とは、見つけることの主体である「この私」というものが、実は本人自身もよく分かっているわけではないことから生じる。それ自身について実はよく分かっているわけではないという存在が、自らにとって良い問いを見つけることができるのか？ ということである。これは、自らなるものに由ることとしての自由が不足しているということではないだろうか。

教育の立場からみるならば、学校教育は児童・生徒にとっての自らなるものに由ることとしての自由を育成していないし、涵養もしていないということになるのではないだろうか。前節で検討した市川の探究活動においては、子どもたちは自由であることを獲得していく経験を積んでおり、荒瀬の探究活動においては、高校生たちは自由であることと格闘する

経験をし、経験知を得ているように筆者にはみえる。

5-4 人の生涯発達における探求と自由

研究志向の探究に対して、筆者がより注目するのは、探求のほうである。この両者の違いとしては、究めようとするか求めようとするかがあり、探究は学問と科学において対象となるものを探究する志向があるとすると、探求は思想や人間についての真理を探求対象として含むものだと考えることができる。

このような探求は生涯続くものであり、人の生涯発達の中にあるものとして位置づけることが可能なものである。例えば、Helson & Srivastava (2001) は、精神的健康を保つ生き方のスタイルに関して、Environmental Mastery (環境習得) と Personal Growth (個人的成長) という2つの次元・尺度があるとして、成熟のタイプの3類型として *conserver*, *seeker*, *achiever* をあげている。鈴木忠はこれについて論じ、保守型、探求型、目標達成型があるとして、「既存の考え方に異議申し立てをする少数派に位置し続けることでこそ納得し満足するような、いわば「とがった」成熟のしかた(探求型)もある。」と言っている(鈴木・飯牟礼・滝口 2016: 197)。ここでいう個人的成長という尺度と探求型の人間が存在するという場合、自由とはいかなるものであるかが問われ続けることになるだろう。個人としての「この私」とは？ その成長とは？ 「この私」にとっての探求とは？ という問いと「私の答え」なるものは、「この私」の自由を問い続けることであるだろう。環境習得という尺度に関しては、環境、すなわち、「この私」以外のものによって「この私」が評価されることになると捉えられるのだが、そこに自由はあると言えるのだろうか？ という問いが生じ、あるとしたら、それはどのようなものかという検討が必要になるだろう。

人の自由というものについての探究かつ探求を行なう場合の究極の答えの一つとして、V.E. フランクルの思想があるだろう。フランクルは人間にとっての絶望的な極限状況の中で、人生は、人生とは何かと問うものではなく、人生とはこういうものであると自らの「答え」を出すものだという思想を生み出した。フランクルがいう態度価値とは、人が絶望の世界とみなされた世界で生きているという場合に、「この私」がその絶望に対して、どのような態度、姿勢、精神、心の在り方を持ってこの世に在ることができるか、ということに価値があるとするものであ

る。このようなフランクルの思想とは、究極の自由と言えるものであるかもしれない。

5-5 ディシプリンと自由

本論で考究している自由とは、個人の自由であり、個人としてどうなるか？ というものである。しかし、「自らなるものに由ること」としての「自ら」とは、3-3節で述べたように、他者や出来事や環境の影響を受けてしまうと捉えるものでもある。この点について、学習とディシプリンと組織をキーワードとする思想を述べているものとして、ピーター・センゲの著作を取り上げて検討してみる。

Senge (2006) の著作“The Fifth Discipline: The Art & Practice of Learning Organization”は、日本語版では『学習する組織 システム思考で未来を創造する』という題名である。原書では、ディシプリンはキーワードとなる概念であり、5つ目のディシプリンとは、システム思考（原書では systems thinking）のことである。

センゲは、まず learning と旧字の學習という漢字を重視しており、學習とは、自己向上の道をマスターすることだと言っている（センゲ他 2014: 34）。学習する組織、それは自己向上の道をマスターしようとし続ける組織になるわけだが、5つのディシプリンが必要だとして、自己マスター、メンタル・モデル、共有ビジョン、チーム学習、システム思考があり、5つ目のディシプリンとして、システム思考はすべてのディシプリンを統合し、融合させて一貫性のある理論と実践の体系をつくるディシプリンだとしている。ディシプリンとは、実践するために勉強し、習得しなければならない理論と手法の体系であり、ディシプリンを実践するということは生涯をかけてディシプリンを習得するというものである（センゲ 2011: 39-47）。

本論でのこれについての注目は、センゲの言うディシプリンの中で自己マスターと呼んでいるものと、システム思考としているものである。自己マスターとは原書では personal mastery で、ビジョン（私たちがやりたい姿）と今の現実（やりたい姿に対する現在地）のはっきりしたイメージを対置させたときに「創造的緊張」と呼ばれるものが生まれ、創造的緊張はビジョンと現実を結びつける力であり、解決を求めて自然に引っ張り合う力が働くことで生まれる、とするものである。自己マスターの本質

は自分の人生においてこの創造的緊張をどう生み出し、どう維持するかを学習することだとセンゲは言っている（同:196）。

そして、システム思考については、センゲ他 (2014) の用語解説において、「システムとは、その中にあるいろいろな要素が時間の経過と共にお互いに継続的に影響を与え合うために「お互いに結び合った」状態だ、と人が知覚する何らかの構造を指す。「システム：system」という語はギリシャ語の動詞「sunistanai」に由来するもので、もともとは「一緒に立つことを促す」という意味だ。この原語が示唆するように、何らかのシステムの性質には、人がそれを観察する理解の仕方も含まれる。」（センゲ他 2014: 197）とされているものである。

このようなセンゲの思想について、本論の立場では次のように主張することになるだろう。まず、日本語で言う学習は全体的な諸力の「底上げ」効果が期待されるものであり、より重要なのは岡崎 (2022) でも言うように、英語でいう activity の活性化のほうである。第二に、personal mastery に必要なものとして本論で言う自由があると言える。日本人は組織の内外において、社会的な優劣関係の中に生きており、世間的な優位劣位に腐心しがちである。相対的な価値観の世界の中に生きて、環境習得的に保守である日本人に不足しているのは、個人的成長としての自由ではないだろうか。西洋人としてのセンゲにとって自由とは freedom や liberty であるのだろうと推察されるのだが、日本語の自由には self-reliance としての可能性もあるのである。そして、personal mastery なるものについてのシステム思考があるはずなのだが、それはどのようなものであるのかという問いがあるだろう。第三に、システム思考であるが、システムなるものについては、三種類のものがあるだろう。まず、人間がつくったものではないものを人間がシステムとして捉えているもの、例えば人体の免疫システムがあり、二つ目に人間が日々作り出している人工的なシステムがあり、三つ目のものとして、人間が作り出しているのだが、流動的で絶えず変化していくシステムがあるだろう。この一つ目と三つ目のものは、いわば「生きている」システムである。本論でいう自由にもシステムがあるか？ と問うならば、システムなるものが人の身体の中に見出せるものである限り、自由なるもののシステムについても考え続けるものになるだろう。第四に、セ

ングにはシステム市民 (systems citizens) という概念があり、子どもも大人もシステム市民になることを目指すとしているのだが、本論の立場では、自らなるものに由ることのできる市民、自由市民、そして自由自在市民をこそ目指すことになるだろう。

6 結びに代えて

本論は、日本語教育における上級クラスでの探求志向のプロジェクトの授業についての筆者の問題意識から始まって、人の内発的な活力の質を自由という言葉についての考究によって捉えようとしたものである。

人の内発的な活力による母語での言語活動に注目すると、どうなるというのか。日本語の母語話者の場合は、日本語の質の変容が期待される。筆者は、「日本語の母語話者が二度目に身につける日本語」という概念について思索を行なったことがあるのだが、この二度目とは、自分の日本語が質的に変容し、ある時期からそれ以前と以後とでは変化が自覚されるということである。これは、例えば、書く習慣を持たなかった人間がある時期から書くようになったという場合、そこには質的な変容があると捉えられるのではないか、というようなことである²⁾。

そして、社会における様々なシステム化が進んでいくこととの関係について考えさせられる。様々な人工的システムがつくられていき、AI的なものの発展が進んでいくのだが、それは現代人の日々の生活に影響を与え、恩恵を与えるものであると同時に、人の様々な諸力を劣化させるものにもなっていくのではないか。社会的な管理と統制と秩序化が進むことによって、人の個としての内発性が縮減することも想定されるのである。人工的システムをつくり出しているものもまた人の内発的な活力ではないか、とも指摘できるわけではあり、社会の中の人工的なシステム化が進んでいく中で、どのように個としての内発性、すなわち自由をつくっていくことができるかという課題があるだろう。

注

1) 2020年からの世界的なコロナ禍の影響で、教育機関においてオンライン授業が普及し、2022年の後半頃から従来の対面授業が復活するようになった。授業者が臨床的に学習者や学生のことをより深くより

適切に知るためには、対面授業が重視されるだろう。
2) 現代ではインターネットを活用した言語活動が「主流」的に盛んになっており、これによる国民的規模での言語活動の質的変容があると考えられるが、「より良い」質についての考究が必要とされているだろう。

参考文献

- 荒瀬克己 (2007) 『奇跡と呼ばれた学校 国公立大合格者30倍のみみつ』朝日新聞社。
- 荒瀬克己 (2008) 「背伸びが、人を育てる」 茂木健一郎・NHK「プロフェッショナル」制作班編 (2008) 『プロフェッショナル 仕事の流儀 あえて、困難な道を行け』日本放送出版協会, pp.53-104.
- 安西祐一郎 (2005) 「語力と教育」, 大津由紀雄編『小学校での英語教育は必要ない!』慶應義塾大学出版会, pp.248-260.
- 飯澤功 (2016) 「高等学校での探究型学習とアクティブラーニング」 溝上慎一・成田秀夫編 (2016) 『アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習』東信堂, pp.120-139.
- 池田光穂・徐淑子 (2016) 「学習者から探求者へ — オランダ・マーストリヒト大学におけるPBL教育 —」『大阪大学高等教育研究』, 第05号, p.19-29.
- 市川力 (2009) 『探究する力』知の探究社。
- 市川力 (2013) 「学びの同志おっちゃん」 池上彰編 (2013) 『先生!』, 岩波書店, pp.109-116.
- 市川力 (2019) 「創造的な学びをつくる」 井庭崇編 (2019) 『クリエイティブ・ラーニング 創造社会の学びと教育』, 慶應義塾大学出版会, pp.481-624.
- 梅棹忠夫 (1989-1994) 『梅棹忠夫著作集』中央公論社。
- 梅棹忠夫・小山修三 (2010) 『梅棹忠夫 語る』日本経済新聞出版社。
- 大津由紀雄編 (2005) 『小学校での英語教育は必要ない!』慶應義塾大学出版会。
- 岡崎洋三 (1988) 『日本語とテンの打ち方』晩聲社。
- 岡崎洋三 (1990) 『本多勝一の研究』晩聲社。
- 岡崎洋三 (2000) 『本多勝一の探検と冒険』山と溪谷社。
- 岡崎洋三・西口光一・山田泉編 (2003) 『人間主義の日本語教育』凡人社。
- 岡崎洋三 (2013) 「言葉の「内言的」意味と、マスターテキストアプローチでの自己表現活動」, 『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』, 第17号, pp.59-64.
- 岡崎洋三 (2014) 「自己表現活動中心のマスターテキスト・アプローチによる自己創作」, 『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』, 第18号, pp.55-66.
- 岡崎洋三 (2015a) 「探求性のある学習」, 『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生

- 交流』, 第19号, pp.65-74.
- 岡崎洋三 (2015b) 「表現の壁と表記の壁」, 『ことばと文字』, 4号, くろしお出版, pp.184-192.
- 岡崎洋三 (2015c) 「初級段階における体験の言語経験化と『私をくぐらせる』活動」, 日本語教育学会2015年秋季大会予稿集, pp.217-222.
- 岡崎洋三 (2016) 「表現活動とアイデンティティと表現活動のZPD」, 西口光一・森篤嗣・岡崎洋三・三代純平「表現活動、エンゲージメント、日本語の習得と教育」, 日本語教育学会2016年春季大会予稿集, pp.24-26.
- 岡崎洋三 (2017) 「初級段階からの自己表現活動によるCCBIの活性化の可能性」, 日本語教育学会2017年春季大会予稿集, pp.266-271.
- 岡崎洋三 (2018a) 「言語活動の活性化による学習の質的変革」, 『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』, 第22号, pp.47-55.
- 岡崎洋三 (2018b) 「表現活動における臨床性のある関係づくりの可能性」, 日本語教育学会2018年春季大会予稿集, pp.87-92.
- 岡崎洋三 (2019) 「リベラルアーツへと向かう日本語教育」, 『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』, 第23号, pp.9-18.
- 岡崎洋三・池田光穂 (2019) 「本多勝一と山口昌男の噛み合わない論争: 1970年の文化人類学と報道ジャーナリズム」, Co*Design, no.6, pp.13-32.
- 岡崎洋三 (2020) 「表現活動の深層を探る」, 西口光一編『思考と言語の実践活動へ 日本語教育における表現活動の意義と可能性』ココ出版, pp.35-64.
- 岡崎洋三 (2021) 「日本語学習と表現活動」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第25号, pp.21-30.
- 岡崎洋三 (2022) 「社会の中の表現活動による日本語教育における表現活動の活性化」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第26号, pp.19-29.
- 加藤周一 (1991) 「明治初期の翻訳」 加藤周一・丸山真男編『翻訳の思想』, 岩波書店, pp.342-380.
- 玄侑宗久 (2004a) 『多生の縁』文藝春秋.
- 玄侑宗久 (2004b) 『釈迦に説法』新潮社.
- 玄侑宗久 (2006) 『ベラボーな生活 禅道場の「非常識」な日々』朝日新聞社.
- 玄侑宗久 (2007) 『玄侑和尚と禅を暮らす』海竜社.
- 玄侑宗久・南直哉 (2008) 『〈問い〉の問答』俊成出版社.
- 玄侑宗久 (2010a) 『しあわせの力 禪的幸福論』角川SSコミュニケーションズ.
- 玄侑宗久 (2010b) 『莊子と遊ぶ 禪的思考の源流へ』筑摩書房.
- 玄侑宗久 (2010c) 『日本的』海竜社.
- 玄侑宗久 (2014) 『さすらいの仏教語』中央公論新社.
- 玄侑宗久 (2016a) 『ないがままで生きる』SBクリエイティブ株式会社.
- 玄侑宗久 (2016b) 『莊子』NHK出版.
- 鈴木大拙 (1996) 『東洋の心 新装版』春秋社.
- 鈴木忠 (2008) 『生涯発達のダイナミクス 知の多様性 生きかたの可塑性』東京大学出版会.
- 鈴木忠・飯牟礼悦子・滝口のぞみ (2016) 『生涯発達心理学 認知・対人関係・自己から読み解く』有斐閣.
- 鈴木忠・西平直 (2014) 『生涯発達とライフサイクル』東京大学出版会.
- センゲ,ピーター (2011) 『学習する組織 システム思考で未来を創造する』 枝廣淳子、小田理一郎、中小路佳代子訳 英治出版.
- センゲ,ピーター、キャンブロン=マッケイブ,ネルダ、ルーカス,ティモシー、スミス,ブライアン、ダットン,ジャンス、クライナー,アート (2014) 『学習する学校 子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する』リヒテルズ直子訳 英治出版.
- 中村元編 (1975) 『佛教語大辞典』東京書籍.
- 西口光一・滝井未来・義永未央子・岡崎洋三 (2012) 「対話原理に基づく基礎日本語習得 — 理論と実践 —」, 日本語教育国際研究大会名古屋2012研究発表予稿集, 第2分冊, p.48-49.
- 西口光一 (2020) 「表現活動主導の日本語教育」 西口光一編 (2020) 『思考と言語の実践活動へ 日本語教育における表現活動の意義と可能性』, pp.1-18, ココ出版.
- 西口光一編 (2020) 『思考と言語の実践活動へ 日本語教育における表現活動の意義と可能性』ココ出版.
- ひろさちや・玄侑宗久 (2004) 『三世をみつめる』ビジネス社.
- 藤原さと (2020) 『「探究」する学びをつくる』平凡社.
- フランクフル, V. (1999) 『「生きる意味」を求めて』 諸富祥彦監訳 上嶋洋一・松岡世利子訳 春秋社.
- フランクフル, V. (2002) 『夜と霧 新版』池田香代子訳 みすず書房.
- フランクフル, V. (2002) 『意味への意志』 山田邦男監訳 春秋社.
- 細川英雄 (2020) 「私はいかにして表現活動主義者となったか 思考と表現の往還から学習者主体へ」 西口光一編 (2020) 『思考と言語の実践活動へ 日本語教育における表現活動の意義と可能性』ココ出版 pp.19-33.
- 細川英雄 (2021) 『自分の〈ことば〉をつくる あなたにしか語れないことを表現する技術』ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- 本多勝一 (1993-1999) 『本多勝一集』朝日新聞社.
- 宮沢輝夫編著 (2012) 『大人になった虫とり少年』朝日出版社.
- 森岡健二編 (1969) 『近代語の成立 明治期語彙編』明

- 治書院.
- 安永祖堂 (2004-2005) 「禅語としての「自由」をめぐって」, 『臨濟宗妙心寺派教学研究紀要』, 第2号, pp.153-173.
- 養老孟司 (1985) 『ヒトの見方』 筑摩書房.
- 養老孟司 (1986) 『形を読む』 培風館.
- 養老孟司 (1989) 『唯脳論』 青土社.
- 養老孟司 (2004a) 『死の壁』 新潮社.
- 養老孟司 (2004b) 『運のつき 死からはじめる逆向き人生論』 マガジンハウス.
- 養老孟司・玄侑宗久 (2005) 『脳と魂』 筑摩書房.
- 養老孟司編 (2005) 『養老先生と遊ぶ 養老孟司まるごと一冊』 新潮社.
- 養老孟司 (2011) 『養老孟司の大言論 I II III』 新潮社.
- 養老孟司 (2015) 『虫の虫』 廣濟堂出版.
- 養老孟司 (2019) 「解剖学という基礎」, 『解剖学雑誌』 94巻, pp.34-37.
- 養老孟司 (2021) 『まる ありがとう』 西日本出版社
- Helson, R., & Srivastava, S. (2001). Three paths of adult development: Conservers, seekers, and achievers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80 (6), 995-1010.
- Senge, P., (2006). *The Fifth Discipline The Art & Practice of the Learning Organization*. New York: Currency Doubleday
- Suzuki, D. (1990). *Zen and Japanese Culture*. Charles E. Tuttle Company.